

2021. 4. 11 (日) マタイ24:15~22

24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——

24:16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。

24:17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。

24:18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。

24:19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。

24:20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。

24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。

24:22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。

<説教>

主イエスは弟子たちの質問にお答えになり、ご自分が再びこの世に来られ、世が終わる時のしるしがどのようなものか(24:3)お教えになりました(4節から)。

キリストを名乗る者が大勢現れ、多くの人を惑わすこと(5)、戦争や戦争のうわさを聞くこと(6)、民族対民族、国対国の敵対、あちこちで起こる飢饉と地震(7)のことをイエスは言われました。

しかしそれらの出来事で終わりが来るのではなく(6)、それらは「すべて産みの苦しみの始まり」(8)にすぎないと言われました。

それらの出来事は、イエスの弟子たちだけでなく、そうでない多くの人にも災難、苦しみとして及びます。

しかしイエスの弟子たちはそれらに加えて、更にキリストの名のために、キリスト故の苦しみ、迫害を受けることになることになるとイエスは言われました。

「そのとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」(9)

更に、「そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。」(10-12)

このことは、弟子たちの外だけで起こるとは限りません。

弟子たち同士の間でさえ起こり得ることもあります。

そんな苦しみ、迫害をうけつつ、(本日の聖書箇所でも言われているように、〈選ばれた者たち〉は)、ただキリストにある神の恵みによって、最後まで耐え忍んで救われるのです(13)。

そんなイエスの真の弟子たちによって苦難の中で「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来」とイエスは言われました(14)。

このように世の終わる時のしるしについてお教えになり、特に弟子たちが多くの人々から、また多くの偽預言者たちから受ける苦しみについてお教えになり、そんな中で弟子た

ちが最後まで耐え忍び、福音を宣べ伝え証しする中でご自身が来られて世の終わりが来ることまでまずイエスはお教えになりました。

そのうえでイエスは改めて、ご自分が来られ、世を終わらせる時のしるしについてお教えになりました。

それは、「反キリスト」が現れるということです。

もうこれまでの教えの中でも、イエスの弟子たちを憎み、苦しめ、殺す人々のこと、つまり、互いに裏切り、憎み合う多くの人々のこと、大勢の偽預言者のこと、不法がはびこり多くの人の愛が冷えることが言われたことでした。

明らかにそういう人々の背後には悪魔の惑わし働きがあり、そういう人々が反キリストとして神に敵対し、神を冒瀆し、神の民を偶像礼拝に誘惑し、神から引き離し、滅ぼそうと大いに働くのです。

24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——

24:16 ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。

「聖なる所」とは、今し方、弟子たちが改めてその美しさ、立派さに感心したエルサレムの神殿のことです。

この世で最高に聖なる場所だとユダヤ人たちが考え誇りにしていたエルサレム神殿が、預言者ダニエルが語ったように（ダニエル書 9:27. 11:31. 12:11）異教の神々によって汚されることになるというのでした。

いやもうすでにそのことは起きてしまいました。

紀元前 168 年、当時のパレスチナ地方を支配していたシリアの王アンティオコス・エピファネスはユダヤ人にギリシャの神々を礼拝させようとしてエルサレム神殿の祭壇で豚のいけにえを捧げ、神殿をゼウスの神殿にしようとしてしました。

それはユダヤ人にとっては屈辱の歴史、記憶でした。

そしてイエスがお語りになっている時からおよそ 40 年近く後、紀元 70 年にはこのときの支配者であるローマ帝国軍によってエルサレム神殿は完全に破壊されてしまいます。

このように弟子たちにお教えになったときのイエスの言葉をルカは、「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。」と記しています（ルカ 21:20）。

このように、ダニエルが預言したように現れる〈荒らす忌まわしいもの〉、偶像を真の神の神殿に据えて、神の民を偶像礼拝に誘惑し、強制するような「反キリスト」によくよく注意するようにイエスは言われたのです。

ですからイエスは「見たら」、そして「よく理解せよ」と言われるのです。

つまり、見ても見ず、聞いても理解しない人が多いからでしょう。

そういえば、イエスに敵対していた律法学者やパリサイ人たち、サドカイ人たちもそういう人たちでした。

彼らもまた立派な（？）「反キリスト」だったと言えるでしょう。

そしてそのときは異教徒（異邦人）によらずとも、彼らユダヤ人自ら不法をはびこらせ、

神殿を「強盗の巢」として汚していたのでもありました。

エピファネスであれ、ローマ帝国軍であれ、律法学者やパリサイ人たちであれ、「反キリスト」の現れが、まさに「終わりの時」のしるしでした。

後に使徒ヨハネはこう言います。

「幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。」(Iヨハネ 2:18)

そして、そんな反キリストと反キリストによって占拠された神殿からは、大至急、必死で取るものも取りあえず「逃げなさい」とイエスは言われました。

「逃げる」と聞くと何か弱虫のような、臆病のように聞こえるかもしれませんが、ここでは積極的な意味に理解するのがいいと思います。

既にイエスは弟子たちを宣教にお遣わしになったときに、「一つの町で人々があなたがたを迫害するなら、別の町へ逃げなさい。」(10:23a)とお命じになりました。

これは迫害されたので恐れをなして尻尾(しっぽ)を巻いて逃げなさい、と言われたものではありませんでした。

「だれかがあなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家や町を出て行くときに足のちりを払い落としなさい。まことに、あなたがたに言います。さばきの日には、ソドムとゴモラの地のほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。」

(10:14,15)と言われたように、それはキリストを拒む者に対する、キリストの使者・しもべとしての権威ある態度でした。

その後(16-22節)にあるように、キリストのための困難、迫害を耐え忍び、キリストに信頼して宣教した末のことでした。

「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」(10:22)と言われたのも 24:9, 13 と全く同じです。

いくら自分たちのお気に入りの、自慢の神殿でも、反キリストの意のままになり、もはやまともな礼拝が捧げられていないなら、偶像礼拝の場に墮落してしまっているなら、イエスに倣って、イエスが言われたように「見よ。お前たちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」(23:38)と宣言して、足のちりを払い落として出て行きなさい、ということでしょう。

そうでないとあなた自信が反キリストによって汚され、また反キリストに支配された神殿ともども滅ぼされてしまう、ということでしょう。

24:17 屋上にいる人は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはいけません。

24:18 畑にいる人は上着を取りに戻ってはいけません。

生きるか死ぬかの緊急事態だという、事の深刻さを「よく理解せよ」です。

とは言え、逃げるのは確かに簡単ではありません。

家にある物(食料かお金か?)も上着も持たずに逃げるのは不安です。

そして反キリストは、悪魔は、その手下ども敵の数は多く、力は強いでもあります。

それでも反キリスト、悪魔とその手下どもとは絶縁しなければなりません。

24:19 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。

さすがに自分の子を見捨てるわけには行かない母は逃げるのに想像を絶する肉体的、精神的困難があるでしょう。

「**哀れです**」とは「ああ！」という感嘆詞です。

ここからイエスのあわれみの深さを「よく理解せよ」です。

24:20 あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい。

冬は寒く、家から食べ物も持たずに、上着も着ないで逃げるのは肉体的、精神的に厳しいものです。

安息日だと規定以上の距離を行くことになってしまう、「旅」になってしまうと行って逃げるのを躊躇してしまうかもしれません。

ですから「**祈りなさい**」とイエスは言われました。

逃げるべき時がいつか、を自分で決めることはできないでしょう。

それは神の御声に従ってすることであり、その意味では神が定めておられます。

しかしそれでも、いわゆる運命論的に考えてはなりません。

どこまでもイエス・キリストの故に、キリストにあって神に愛されている神の子として、神の最善のご配慮に信頼して、自由に祈るようにイエスは言われるのです。

それにしても、肉の思いに逆らって、神の声に従って、反キリストに逆らって反キリストから逃げることは、積極的だと言ってもやはり闘いです。

おとなしく黙って反キリストに従っていれば何も起こらないのに、わざわざ波風立てるようなことをするのであります。

そういう意味で、反キリストの現れはイエスに従うイエスの弟子たち（私たち）にとって、一層大きな、これまで以上に「**大きな苦難**」が始まる時となるのです。

24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。

24:22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われないでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。

「**選ばれた者たち**」とはイエス・キリストを信じる私たちのことです。

「もしその日数が少なくされないなら、一人も救われない」私たちの弱さをイエスは誰よりも（私自身よりも）ご存知です。

そして私たちの信仰がなくならないように、父なる神にとりなし祈ってくださいます。

「**大きな苦難**」が起こる時も、その期間も全く最善なる神のあわれみ、恵みによって定まっているのは確かですが、同時に全く最善なる神のあわれみ、恵みの故に、つまりイエス・キリストにあって、キリストの故に「**その日数は少なくされ**」るのです。

どんな暗黒（と思われる）時でも、神はご自分の民を完全に守ってくださるのです。